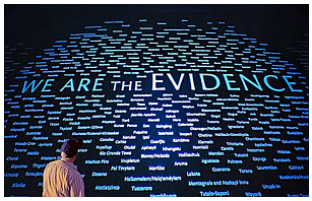
大阪インターナショナルチャーチ　　ダニエル・エルリック牧師2013/08/11
シリーズ: 使徒言行録# 57　　聖書箇所: 使徒22:23-23:11　中心聖句: ペトロ第一1:3
タイトル: 復活があるから　　特別行事: 子どもたちのためのメッセージ

I.　導入



おはようございます。先週は、一人ひとりの証が重要であることをお話しました。私たちの周囲にいる人々にとって、キリスト教を信じる根拠を示す唯一のものは私たち自身です。ですから、言動においてできる限りの証を分かち合い、イエスの良き証人となることはとても大切です。

先週のメッセージでは、アントニア要塞の階段からパウロが語った証を検証しました。ローマ兵に繋がれたパウロは千人隊長の許可を得て、その直前まで彼に暴力を振っていた群衆に語りかけました。パウロが異邦人について触れるまでは、群衆は静かに聞いていました。**使徒22:21-22「22:21　『すると、主は言われました。[行け。わたしがあなたを遠く異邦人のために遣わすのだ。] 22:22 パウロの話をここまで聞いた人々は、声を張り上げて言った。『こんな男は、地上から除いてしまえ。生かしてはおけない。』」**パウロは自身の経験を話していただけですが、異邦人が救いのメッセージを聞くことを神がお望みだという考え方は、ユダヤ人にとって受け入れがたいものだったようです。

では、使徒22章を読んで、その後の経緯を見てみましょう。

II.　聖書朗読(使徒言行録22:23-30, 新共同訳)

22:23 彼らがわめき立てて上着を投げつけ、砂埃を空中にまき散らすほどだったので、 22:24 千人隊長はパウロを兵営に入れるように命じ、人々がどうしてこれほどパウロに対してわめき立てるのかを知るため、鞭で打ちたたいて調べるようにと言った。 22:25 パウロを鞭で打つため、その両手を広げて縛ると、パウロはそばに立っていた百人隊長に言った。「ローマ帝国の市民権を持つ者を、裁判にかけずに鞭で打ってもよいのですか。」 22:26 これを聞いた百人隊長は、千人隊長のところへ行って報告した。「どうなさいますか。あの男はローマ帝国の市民です。」

22:27 千人隊長はパウロのところへ来て言った。「あなたはローマ帝国の市民なのか。わたしに言いなさい。」パウロは、「そうです」と言った。 22:28 千人隊長が、「わたしは、多額の金を出してこの市民権を得たのだ」と言うと、パウロは、「わたしは生まれながらローマ帝国の市民です」と言った。 22:29 そこで、パウロを取り調べようとしていた者たちは、直ちに手を引き、千人隊長もパウロがローマ帝国の市民であること、そして、彼を縛ってしまったことを知って恐ろしくなった。 22:30 翌日、千人隊長は、なぜパウロがユダヤ人から訴えられているのか、確かなことを知りたいと思い、彼の鎖を外した。そして、祭司長たちと最高法院全体の召集を命じ、パウロを連れ出して彼らの前に立たせた。

III.　教え

パウロが異邦人について語ったことに、群衆は激怒しました。ローマ帝国の千人隊長は、何が起こっているのかを知ろうと、パウロを兵営に入れて鞭打とうとしました。つまり、イエスが十字架にかけられる前にされたのと同じことを、パウロにしようとしていたのです。ローマ帝国の鞭打ち刑は非常に残酷でした。使われるのは通常の鞭ではありません。鞭打ち刑の鞭は三本一組で、鞭の先には金属や骨、ガラスなどが取り付けてあり、打たれると皮膚や肉が裂けます。

ローマ帝国では、鞭打って瀕死状態にすれば、人は本当のことを白状するだろうと考えられていまし

た。しかし、これは逆効果です。拷問に苦しむ人は苦痛を和らげるためなら、嘘をつくからです。ローマ帝国の鞭打ち刑はもう存在しませんが、残念ながら、現代でもあらゆる拷問が世の中で行われています。私の母国でも、近年テロとの戦いの一部で拷問が行われたと聞き、とても悲しい思いです。

使徒22:25「パウロを鞭で打つため、その両手を広げて縛ると、パウロはそばに立っていた百人隊長に言った。『ローマ帝国の市民権を持つ者を、裁判にかけずに鞭で打ってもよいのですか。』」ローマ帝国では、ローマ帝国市民に拷問をすることは法律で禁じられていました。拷問を用いるのは占拠下にあった人々に対してのみです。パウロがローマ帝国市民であると聞いて、兵士たちは驚きました。ユダヤ人がローマ帝国の市民権を持っているのは珍しいことですが、不可能ではありません。パウロは生まれながらの市民だと言っているので、過去にローマ帝国に貢献した報奨として一家に与えられたものかと推測できます。

パウロは鞭に打たれることを恐れていたのではありません。実際、**コリント第二11:24-25**でこう言います。「 **11:24 ユダヤ人から四十に一つ足りない鞭を受けたことが五度。11:25 鞭で打たれたことが三度、石を投げつけられたことが一度、難船したことが三度。一昼夜海上に漂ったこともありました。**」パウロは苦しみを十分味わっていました。イエスに栄光をもたらすためなら、苦しみを受ける覚悟がありました。けれども、ここでパウロはローマ市民としての権利を主張します。このことが、イエスの証をするさらなる機会をもたらしました。

千人隊長は、パウロがローマ市民だと聞いて鎖を解きました。しかし、なぜそれほどの騒ぎになったのか調査したいと考えました。**使徒22:30「翌日、千人隊長は、なぜパウロがユダヤ人から訴えられているのか、確かなことを知りたいと思い、彼の鎖を外した。そして、祭司長たちと最高法院全体の召集を命じ、パウロを連れ出して彼らの前に立たせた。**」

エルサレムの最高法院は、イスラエルの長老70人からなっており、ユダヤ人の間では、文字通り法の最高権威でした。とは言え、当時は完全にローマ帝国の支配下にあり、ローマ帝国の千人隊長に召集されれば、それに応じないという選択はありませんでした。長老たちはこのことに反感を持っていたでしょうし、議会はおざなりな雰囲気だったでしょう。使徒23:1-11を読み、パウロが最高法院の前に立たされた後どうなったか見ていきましょう。

IV. 聖書朗読 (使徒言行録23:1-11, 新共同訳)

23:1 そこで、パウロは最高法院の議員たちを見つめて言った。「兄弟たち、わたしは今日に至るまで、あくまでも良心に従って神の前で生きてきました。」 23:2 すると、大祭司アナニアは、パウロの近くに立っていた者たちに、彼の口を打つように命じた。 23:3 パウロは大祭司に向かって言った。「白く塗った壁よ、神があなたをお打ちになる。あなたは、律法に従ってわたしを裁くためにそこに座っていながら、律法に背いて、わたしを打て、と命令するのですか。」 23:4 近くに立っていた者たちが、「神の大祭司をののしる気か」と言った。 23:5 パウロは言った。「兄弟たち、その人が大祭司だとは知りませんでした。確かに『あなたの民の指導者を悪く言うな』と書かれています。」 23:6 パウロは、議員の一部がサドカイ派、一部がファリサイ派であることを知って、議場で声を高めて言った。「兄弟たち、わたしは生まれながらのファリサイ派です。死者が復活するという望みを抱いていることで、わたしは裁判にかけられているのです。」

23:7 パウロがこう言ったので、ファリサイ派とサドカイ派との間に論争が生じ、最高法院は分裂した。 23:8 サドカイ派は復活も天使も霊もないと言い、ファリサイ派はこのいずれをも認めているからである。 23:9 そこで、騒ぎは大きくなった。ファリサイ派の数人の律法学者が立ち上がって激し

く論じ、「この人には何の悪い点も見いだせない。霊か天使かが彼に話しかけたのだろうか」と言った。 23:10 こうして、論争が激しくなったので、千人隊長は、パウロが彼らに引き裂かれてしまうのではないかと心配し、兵士たちに、下りていって人々の中からパウロを力ずくで助け出し、兵営に連れて行くように命じた。 23:11 その夜、主はパウロのそばに立って言われた。「勇気を出せ。エルサレムでわたしのことを力強く証ししたように、ローマでも証しをしなければならない。」

V.　教え

パウロは、最高法院の前での弁明をこう切り出します。**(使徒23:1)「兄弟たち、わたしは今日に至るまで、あくまでも良心に従って神の前で生きてきました。**」これは、今まで罪を犯したことがないということではありません。罪に気づくたびに、悔い改めてきたということです。とくに、イエスを告げ知らせることについて、良心に従って神の御前で務めを果たしてきたと、最高法院に語っているわけです。つまり、彼自身のしたことは、神の御目に正しいことをしようとしたに過ぎず、それ以外の思いはないということです。

この主張に、アナニアはパウロの口を打つように命じました。このように急で不当な処罰は、明らかに最高法院の規律に反するものです。当然、パウロはこれに抗議します。**使徒23:3「白く塗った壁よ、神があなたをお打ちになる。**」これは、墓を白く塗るというユダヤ人の慣習を引き合いに出しています。墓を白く塗るのは、人々が知らずに墓に触れて汚れることのないためです。

イエスもファリサイ派の人々を非難するのにこのたとえを用いられました。**マタイ23:27-28「23:27　律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。白く塗った墓に似ているからだ。外側は美しく見えるが、内側は死者の骨やあらゆる汚れで満ちている。23:28 このようにあなたたちも、外側は人に正しいように見えながら、内側は偽善と不法で満ちている。**」

パウロの抗議は正当な内容でしたが、その命令を下したのが大祭司だと知って謝罪しました。なぜパウロがすぐに大祭司に気付かなかったのかと思う人もいるようです。もしかすると、目が悪かったのかもしれません。そうでなくても、大祭司が正装姿でなければ、わからなかったのも無理はありません。千人隊長が突然最高法院を召集したので、大祭司は着替える暇もなくやってきた可能性もあります。パウロが最高法院の議員に会うのはおそらく20年ぶりだったことも忘れてはいけません。20年前の当時、アナニアは大祭司ではありませんでした。

使徒23:6「パウロは、議員の一部がサドカイ派、一部がファリサイ派であることを知って、議場で声を高めて言った。『兄弟たち、わたしは生まれながらのファリサイ派です。死者が復活するという望みを抱いていることで、わたしは裁判にかけられているのです。』」パウロはこう言って、最高法院の注意を復活という主要な問題へと集めます。この発言により、議会で意見が割れるのは必至でした。使徒言行録の学びで見てきたとおり、パウロは機会があればイエスの復活を告げ知らせてきました。イエスが生きておられ、それによって大きな喜びや希望がもたらされることを語りました。それは、生ける主、永遠と復活の命を与えてくださる主に仕えているという喜びと希望です。

最高法院の議員は、ファリサイ派とサドカイ派という競合関係にある分派のどちらかに属していました。ファリサイ派は、旧約聖書とそこに記された奇跡をすべて信じていました。彼らには彼らなりの聖書解釈があり、イスラエルの王となるメシアのみを待ち望んでいました。全世界の救い主が来られるとは考えていなかったのです。しかし、聖書が復活について教えていることを認識しており、それを信じていました。少なくとも数人のファリサイ派はクリスチャンになりました。これに対し、サドカイ派は旧約聖書の預言者を否定し、モーセ五書と神殿礼拝に重きを置いていました。御使いや悪霊は信じておらず、復活も信じませんでした。パウロの言葉は、最高法院の中に存在する教理の不一致を表面化させました。

あまりの騒ぎに、千人隊長はアントニア要塞の兵舎にパウロを連れて行かなければならないほどでした。**使徒23:11「その夜、主はパウロのそばに立って言われた。『勇気を出せ。エルサレムでわたしのことを力強く証ししたように、ローマでも証しをしなければならない。』」**パウロは、エルサレムのユダヤ人に証をしようと二度試みましたが、どちらも千人隊長がパウロを助け出さなければならない事態となりました。パウロは依然、千人隊長に捕らわれたままです。どれほど落胆したでしょう。そのとき、主イエスがパウロのもとに来て、励ましてくださいました。

イエスは、「**勇気を出せ。**」とおっしゃいました。「しっかりせよ」とも訳されています。イエスは、パウロがエルサレムで忠実に証をしたことを認めておられます。その上で、ローマでも同じように証をしなければならないとおっしゃいます。イエスの言葉にパウロはとても励まされたことでしょう。これは、私たちにとっても大きな励ましとなります。福音を伝えようとして失敗に終わったことがありますか。パウロはユダヤ人の前で証をしましたが、その反応は二度とも暴力や脅しでした。パウロは群衆に兄弟たちと呼びかけましたが、人々は耳を貸しませんでした。あなたの家族や友人も、あなたの証に否定的な反応を示したでしょうか。福音を分かち合おうという試みの成果が見えなくても、神はそこに働いてくださり、実はいつか必ず実ります。主の御名を大胆に語るなら、主イエスがその忠実さを良しと認めてくださると、私たちは確信しています。

主はパウロにおっしゃいました。「**ローマでも証しをしなければならない。**」つまり、エルサレムで殺される心配はないということです。そのようなことは起こらない、用意した働きがまだあるから、というわけです。パウロが与えられた使命をやり遂げるまでは、命を保証すると主が約束しておられるのです。パウロは、ローマに行って証をすることを長らく望んでいました。エルサレムに来る数か月前にも、ローマの教会に宛てた手紙で、ローマの信徒を訪ねたいと述べています。**ローマ1:13**でパウロはこう記しました。「 **兄弟たち、ぜひ知ってもらいたい。ほかの異邦人のところと同じく、あなたがたのところでも何か実りを得たいと望んで、何回もそちらに行こうと企てながら、今日まで妨げられているのです。**」主は、ローマに行って福音を知らせるチャンスがパウロに与えられると、ここで約束されました。

パウロは違った状況を望んだかもしれません。今置かれた状況では、パウロはローマ兵に伴われてローマに向かいます。ここから先の使徒言行録では、パウロはローマ帝国の捕らわれ人です。しかし、ローマ兵につながれて旅をすることに利点もありました。どこにも逃げることはできませんが、それは看守も同じことです。つまり、看守に福音を伝える機会に満ち溢れています。家族で一人だけクリスチャンだという理由で、捕らわれ人のように感じる人がいるようですが、ノンクリスチャンの家族と同居しているなら、家族もあなたの影響を受けずにはいられないということを忘れないでください。言葉と行動をもって神の愛を忠実に証しつづけるなら、そのインパクトは必ず残るでしょう。

VI. 結び

主イエスがパウロに語られた言葉は、とても心強いものでした。それ以上に、パウロの窮状に主イエスが来てそばに立ってくださったことこそ、大きな励ましだったに違いありません。復活のおかげで、パウロと同様、私たちもひとりぼっちではありません。イエスは見えなくても、聖霊をとおしてここにともにいてくださいます。私とともに歩み、ともに語り合ってくださいます。主はよみがえられました。主は生きておられます。主は今ここにともにおられます。

- 復活があるから、死は打ち負かされた敵である。(参照: ローマ 6:9, テモテ第二 1:10, 黙示録 21:4)
- 復活があるから、イエスは神の御座の前で常に私たちのためにとりなすことがおできになる。(参照: 黙示録 8:34, ヘブライ 7:25)
- 復活があるから、イエスを信じると、私たちは命に至る希望へと生まれ変わる。 (参照: ペトロ第一

1:3, テトス 1:2)

- イエスの復活があるから、復活と永遠の命の約束が本物であると証明されたことを確信できる。(参照: コリント第一 15:4, ヨハネ 11:25, テサロニケ第一 4:14)
- 復活があるから、私たちは決してひとりぼっちではない。イエスは生きておられ、私たちとともにおられる。(参照: マタイ 28:20, ヘブライ 13:5)
- 復活があるから、聖書にある神の約束が真実であると確信できる。(参照: コリント第二 1:20, ペトロ第二1:4, フィリピ 4:19)
- 復活があるから、この世の苦しみを分かってくださる主、生ける主に仕えていると確信できる。(参照: ヘブライ 4:15, ヘブライ 2:14)
- 復活があるから、イエスが再臨され、生きる者も死んだ者も同様に義とあわれみをもって裁かれると確信できる。 (参照: 使徒 17:31, 使徒 10:42, フィリピ 2:9-10)
- 復活があるから、神の愛がこの世のすべての罪と死に打ち勝ったと確信できる。また、信じる者に癒しをもたらすとも確信できる。 (参照: ヨハネ 3:16, ローマ 8:38-39, コリント第一 15:55-57, 使徒 4:10)

アーメンでしょうか。アーメンですね。では最後に**ペトロ第一1: 3**を読みましょう。「**わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように。神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、**」祈りましょう。

VII. 祈り